



子どもたちが「自分ごと」として取り組む学習を促す教師の手立てとは

1

主体的・対話的で深い学びを目指す授業の真実

改訂版学習指導要領で提起された、授業は主体的・対話的で深い学びをもたらすように計画されるべきであるという考え方が広く浸透し、今日に至っている。教師の一方通行の講義が中心となるような授業ではなく、子ども同士の話し合いや発表を踏まえた双方向の交流を取り入れた授業へと、授業観・指導観の転換が図られてきた。

今なお引き続きコロナ禍にあって、子どもたちの交流や体験的な活動に対する制約は否めない。しかしそれでも、多くの教室では、教師が配慮しながら、家庭科、技術・家庭科家庭分野（以下「家庭科」と称する）の子どもが主体となる学びをつくろうと授業の工夫がなされてきた。

筆者は、さまざまな機会に、小・中・高校すべての校種の家庭科の授業を参観する機会を得て、それぞれの学校種における子どもたちの発達段階を踏まえた家庭科教育の特徴について考えてきた。近年の「主体的・対話的」な活動を取り入れた授業を参観する中で、ふと思うことがある。それは、本当にここで子どもたちは「主体的」になっているのだろうか、「主体的にさせられている」のではないかと、という疑問である。同時に、「対話的」というけれど、話し合いが設定されていれば対話が成り立つというわけではない。教師によって、授業という枠組みの中で、やむを得ず「意見交換を余儀なくされている」という状況になってはいないか？という疑問が浮かぶことがある。このような問いが浮かぶ授業では、子どもたちは一見して活発に交流をして、ときばきと考えをまとめて発表することはできているように見える。しかし、子どもたちの発表を聞いてみると、どこか一般的で妥当な回答になっていて、「この子

ならでは」「この子の家庭ならでは」の実感が伝わってこないのである。授業中の教師の指示に対し、熱心に取り組んでいたとしても、子どもたちが自分自身や自分の家庭生活に目を向け、自分にとっての課題と受け止めて考えていなかったとしたら、そして授業だから、教師に指示されたから、という理由以上の意味を見出していないとしたら、「主体的」に学んでいるとは言えないだろう。「対話」にしても、自分の考えを友達に聞いてもらい感想を言ってほしい、友達の意見を聞いてアドバイスしたい、という心の中の強い思いに動かされて取り組まれているだろうか。子どもたちの「交流したい」という気持ちの本気度が、問われるように思う。教師は、いま展開中の授業の中で子どもたちの本気度がどのくらいの域に達しているのか、その授業の真実を見計らいながら先に進めていく必要がある。

2

学習が「自分ごと」になるということ

人は誰もが、自分にとって「意味がある」と思えることには熱心に取り組む、成果を学びとして吸収し、そうでもないことはやり過ごしているのではないだろうか。これは、大人も子どもも同様で、学びが本当に自分にとって生きて働く力となるためにはまず、「自分ごと」として受け止められるかどうかにかかっている。自分ごとの反対は「他人ごと」、それはすなわち誰かほかの人のことであって自分には関係ないことになる。自分にかかわる、意味のあることとしての「自分ごと」のとらえがなければ、学習者は本気でそのテーマと向き合えないし、自分にとっての課題もつかめないだろう。子どもたちにとって、教科書に載っているから、先生が言うから、という外発的な動機付けでもとりあえず授業は成立

するかもしれないが、ほんとうにその子どもにとって意味のある学びにはならない。

もちろん、いつも子どもたちのほうから問いが生まれ探究が始まるような授業でなければならないというわけではない。導入の扉を開くのは教師の役割であり、教師からの問題提起は重要である。ただその際に、教師が提起する学習場面の設定がどのくらい一人ひとりの子どもの日常に沿ったものであり、子どもたちの課題意識を耕す余地を含んだものになっているだろうか。そして取り組みの道筋において、どれくらい子どもたちが自分自身や家族の実態を踏まえて、自分で考えて見通しを持てるようになっているだろうか。教師がすべて手順を決めて、そのとおりに間違わないよう行動することが求められるような授業では、子どもは教師の想定内の枠の中で考えざるをえない。そうではなく、考える枠自体を子どもたちが自分で工夫してつくり上げるようにしてはどうだろうか。つまり、ほんとうに「主体的」であるためには、学びの方法自体を子どもたちが自分で考える余地が残されていることが望ましい。

3

「自分ごと」と向き合う二つの道筋

それでは、どのようにしたら子どもたちにとって「自分ごと」となる授業が成立するのだろうか。子どもたちが「自分ごと」として物事をとらえて向き合う二つの道筋がある。次に、それぞれについて考えてみたい。

①テーマ自体が自分自身のこと、自分と家族のこと に向き合う場合（直接的な自分ごと）

取り組むテーマ自体が「今の自分」「今の家族」についてのことであり、自分自身や家庭生活を見つめることから自分や家族にとっての課題が見出される。学習への取り組みが、自分にとって具体的なかわりのあることだと実感できるものである。このようなテーマを投げかけるにあたり、このテーマを「いま、考えることの意味・意義」すなわち学習の目的が、子どもたちと共有されていることが大前提である。

②共感をもって相手のことを理解し考えようとする 場合（間接的な自分ごと）

地域の人々とのふれ合いのような、相手意識を持って取り組む学習が自分ごととなるためには、相

手が「他人」ではなく、自分にとって「意味ある存在」として受け止められている必要がある。具体的な相手の人となりや想像できて、その人の置かれている状況や地域の実態に共感することによって、誰かの話ではなく「自分ごと」になるだろう。このような共感力（empathy）は、家庭科教育においても不可欠である。子どもたちには、家庭科の学習において、他者の生活についてその人の立場に立って考えてみる機会を与えたい。相手の立場に立ってみることから、自分にもつながる課題をつかみ考えるための手掛かりを得ることができるだろう。

①と②の「自分ごと」となるための道筋を授業のなかでつくっていくのは、ほかならぬ家庭科教師自身である。その時、子どもたちが自分で考え、体験を通して実感できるような授業を構想したい。自分の目で見て感じて確認した時に初めて、その対象が自分ごととなっていく。自分ごととなり問いが生まれ、向き合うべき課題として認識されることから、学習過程が始まる。教師は、子どもたちの身近なテーマを設定し、子どもたちにとって意味ある存在となる他者と出わせ、子どもたちの視野を広げてほしい。同時に、家庭生活の背景となる社会状況や生活実態に目を向けさせ、子どもたちの中に問いが醸成される支援を行ってほしい。

横浜国立大学教育学部教授
日本家庭科教育学会会長

堀内かおる



【編集部注：執筆者の著書・論文】

著書：「生活をデザインする家庭科教育」（共著）世界思想社 2020年
「人生の答えは家庭科に聞け」（単著）岩波書店 2016年
「家庭科教育を学ぶ人のために」（共著）世界思想社 2013年
「家庭科再発見—気づきから学びがはじまる」（共著）開隆堂出版 2006年
「教科と教師のジェンダー文化—家庭科を学ぶ・教える女と男の現在」（単著）ドメス出版 2001年
論文：「小・中学生のジェンダーに関する実態と意識—家庭科教育の視点から—」 2022年
「学び続ける家庭科教員のためのコミュニティの可能性：自主的な研修会における談話分析とインタビュー調査から」 2021年
「カナダ・マニトバ州における家庭科教員支援体制の現状と課題」 2021年
「学び続ける家庭科教員のためのコミュニティの可能性」 2021年
「ナレッジ・マネジメントの視座からみた家庭科教員コミュニティの可能性」 2020年